



# USEFUL

# USEFUL

札幌市生活科・総合的な学習教育連盟 広報誌

第53号

2022. 3

## 時代や状況が変わっても

札幌市生活科・総合的な学習教育連盟  
委員長 渡部 靖

令和3年度が終わりを迎えようとしています。今年度もコロナ禍の中での教育活動となり、各学校では、様々な制限がある中でも工夫した取組を実践してきました。特に一人一台の端末を活用しての授業が大きく進み、より有効な活用法なども広がりを見せています。また、3学期は、学級閉鎖や職員が出勤できないなどの状況が相次ぎましたが、その端末を活用してのオンラインによる学習支援が当たり前に行われていました。学校教育の現場は大きく変わりつつある、そんな実感をもった今年度でした。

さて、先日のことです。私は、毎日下校時間帯に玄関先に立ち、「さようなら。」の言葉を子どもたちと交わすようにしています。低学年のほとんどの児童を見送った後、一人の1年生が息を切らしながら走って戻ってきました。「どうしたの？忘れ物かい？」と声をかけたところ、「イモリにごはんをあげるのを忘れちゃった。」とのことです。その日はその子が餌をあげる日だったようです。大人であれば、「明日にしよう。」となるかもしれませんが、子どもは違います。「そうか、えらいね。」などと話しながら教室へ行き、一緒に餌をあげました。本校は、1・2年生の教室が隣り合っていて、そのワークスペースの飼育コーナーにアメリカザリガニが12匹、エゾサンショウウオが5匹、アカハライモリが3匹飼育されています（3月10日現在）。イモリやサンショウウオの教材性については、検討の余地があると思いますが、本校の子どもたちはザリガニを含め、一生懸命お世話をしながら、生き物の成長や変化に関心をもち、“生命”について学んでいます。



アカハライモリ

これらの学びは、時代が進んで科学技術がどんなに発展しても、直接関わることに勝るものはありません。一人一台の端末を使いこなしていても、それは単価なる“道具”と捉える必要があります。学習者である子どもが思いや願いを実現していく過程で、それらの“道具”を使いながら、自分の学びを実感していくことが何よりも大切です。

生活科では、「具体的な活動や体験」を通して学んでいくことが大前提になっています。コロナ禍の中で、人と直接かかわることが難しい状況であっても市内の各学校では、工夫を凝らしながら日々の授業の質を高めようと努力してきました。直接対象と関わることで学ぶ生活科の価値をわかっているからです。オンライン環境が発達して新しい授業形態が広まったり、授業の流し方が変わったりしたとしても、冒頭にあげたような「イモリにごはんをあげなきゃ！」

と急いで走って戻ってくる子ども、「雨がたくさん降って、アサガオさんが心配になったの。」と日曜日に学校に来る子ども、このような子どもの姿を追い求めるのが、教師としての喜びであり、やりがいです。時代や学校を取り巻く状況が変わっても、このような子どもたちに一人でも多く接することができるように力を尽くしたいと改めて思った今日この頃です。

### アメリカザリガニの飼育について

環境省の方針として、近々特定外来生物に指定される見通しということです。そうなると、販売目的の飼育は禁止されます。ペットとしての飼育は認められる方向だそうです（ペットとしての飼育も禁止すると、全国で大量のザリガニが捨てられるという危惧があるからだそうです）が、学校での飼育もやがてできなくなるでしょう。



# 「生活科と私」



## 吉田 信興先生 (旭小)

今年もこの季節がやってきました。  
だんだん明るくだんだん暖かくなってきて春の訪れを感じ、  
うれしい気持ちになりますが、  
さみしさを感じる季節でもあります。  
お世話になった方々とのお別れの季節です。  
毎年、3月に発行する USEFUL には、ご退職される先生方に  
生活科や総合的な学習に関わる思い出を書いていただいています。  
今年度は吉田信興校長先生がご退職されます。  
生活科連盟にとって大きな痛手でございます。

いつも前向きなご助言をしてくださいました。  
いつも背中を押してくださいました。  
いつもたくさん褒めてくださいました。  
先生と授業をつくった時間はとても楽しかったです。

今までありがとうございました。  
ご退職されても、  
これからもどうぞよろしくお願いいたします。

# 「令和の日本型学校教育」へと進化した我がが生活科

札幌市立旭小学校 吉田 信興

このタイトルは全くもって私見です。そう思っているのは私だけかもしれないからです。しかし、生活科を長年研究し実践してきた者からすれば、令和の日本型学校教育で求められる「個別最適な学び」と「協働的な学び」に示された子どもの学びのスタイルと教師のかかわりのあり方は、生活科における子どもと教師の姿と見事にマッチングすると感じていただけたと思います。私はすぐに「生活科と同じではないか！！」と思いましたし、「とうとう生活科の考え方がこれからの教育の考え方にまで高まってくれたか！！」と心から嬉しくなりました。

3月8日 札幌教研生活の部員の方々に講演をする機会がありました。その閉会の挨拶の中で加藤秀樹校長先生が私の執筆した原稿を取り上げてくれました。全国連合小学校長会が編集している月刊誌「小学校時報」の10月号の巻頭言の執筆依頼があり、思い切ってこの私見をぶつけてみたのです。連盟仲間の加藤先生が一番食いついてくださってうれしかったです。また、教頭会時代に一緒に仕事をしたことのある栃木の先生からも「吉田先生 お久しぶりです。巻頭言読みました。退職と書いていたので電話しました」とわざわざ電話をいただきました。うれしいものです。ただ内容の事を触れてもらえなかったのは、ちょっと寂しかったなあ……。改めて加藤先生に感謝です。それではせっかくなのでこの紙面で全文紹介いたします。

## 「教えたい」から「育てたい」への教師の意識変革～個別最適な学びと生活科～

全国連合小学校長会常任理事 吉田 信興

「令和の日本型学校教育の構築」の答申に示された、「個別最適な学び」は「生活科」と同じではないか…。私は読んでうれしくなった。それは生活科誕生から研究し続けているからである。生活科の考えが令和の学校教育のベースとして示され、3月で退職する私には最高のプレゼントである。

生活科では子どもの思い願いを大切にする。子どもは対象にかかわる中で「もっと〇〇したい」という意欲（思い願い）が生まれその実現に向け工夫をしてさらに対象にかかわっていく。この過程を繰り返すことにより、ますます思い願いは膨らみ夢中になって対象にかかわり続ける、個の探究学習なのである。それは答申の中の「学習の個性化」と見事に一致している。さらに答申には「指導の個別化」として教師のかかわりについても示されている。「子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していく」。これも生活科における教師の評価と支援のスタンスと見事に一致している。子どもの活動はいつも順調に展開されるものばかりではない。例えば地面を見つめてじっと数分動かない子がいたとする。思考回路が停止してフリーズしているかもしれないし、地面を這っているダンゴムシを夢中で見ているのかもしれない。どちらにしても活動は停滞しているのであり、寄り添って声掛けをして内面を探り理解すること、それを踏まえて活動に促す支援をし、実際に活動に移して順調に進んでいるのかまで把握する必要がある。まさに「指導の個性化」である。

「個別最適な学び」＝「学習の個性化」＋「指導の個別化」という構図であることから、「個別最適な学び」が「生活科」と見事に一致している。

初任から4年が経過した平成元年に私は初めて1年生の担任をした。「新教科生活科を知りたい」と

いう思いと「子どもたちを逞しく育てたい」という願いが生まれ、夢中になって研究実践をした。長年の実践を通して得られた成果が大きく三つある。

一つは「子どもの主体性が育つこと」である。学習の対象がどのようなもの・ひと・ことであっても「やってみよう」という前向きな子どもに育つと確信した。

二つが「創造性が育つこと」である。これには仲間との「協働的な学び」が欠かせない。低学年の子どもは無自覚に活動する。よって個に対して丁寧に活動を価値付け自覚させるとともに、仲間の活動も全体場で紹介し価値付け、様々な対象へのかかわり方があることに気付かせるのである。かかわり方の懐を広げながら対象への新たなクリエイティブなかかわりを子どもに求めることで創造性を高めることに発展した。

最後三つは「個の学びの充実があつての協働的な学び」ということである。子どもが仲間の話を聞きたい、仲間に伝えたい、仲間と一緒に活動したいと仲間を求める時は、自分の活動に満足している、反対に不足や困りがあり助けてもらいたい、自分の活動には不満足でもっと満足したいなど、個の学びが充実しているかどうか重要なのである。

令和の学校教育は「個」にスポットをあて「個」を確かに育てることが重要である。子どもはいつの時代も変わらない。変わるのは教師である。「教えたい」から「育てたい」への意識変革である。

プレバトをよく視聴する私は生活科が「ワンランク昇格」どころではなく「テンランク昇格」ほどの画期的な昇格だと思っています。30年以上経っても「生活科」とは何かを理解できない教師にとっては「昇格」したのか「現状維持」なのかさえ分からないのではないのでしょうか。ですから安易に喜んでばかりはいられません。まずは生活科に限らず、全ての教育活動において「個」の学びを充実させる教師へ、「個」への積極的なかかわりができる教師へ、「個」を育てる教師へと変わっていくことが最重要課題であると思います。

生活科・総合的な学習教育連盟の皆様には、長きにわたり、大変お世話になりました。生活科連盟として発足する以前は、社会科連盟の部員の立場で「出向」という形でかかわらせていただいた時期がありました。理科の方もいれば特活の方もいる中で新たな仲間が新教科「生活」を作り始めていた頃がとても刺激的でした。社会科がネタ研究、生活科は低学年の子どもの研究。どちらも魅力的でありましたが軍配は生活科にあがりました。私はよい選択をしたと思います。その選択のきっかけになった一つが旭小学校に勤務したことにあります。神様が「もう生活科で生きろ」と耳元でささやきました。平成13年のことです。それまでは「会議と言えば旭小」「授業部会と言えば旭小」「生活科連盟の部員としての初仕事が旭小の本間達志先生の授業づくり」と完全に連盟の仕事のステージになっていました。そして今度は勤務です。着任してすぐの6月に自校の研究会があり、私も授業者でした。生活総合の全国・全道レベルの研究大会のようなものすごい規模の旭小の研究会でした。でもそれを最後に旭小自体が道徳の研究を始めたりしてトーンは落ちていきました。しかし私は脈々と続く地域とのつながりを更に強く幅広いものにし、子どもたちが生活総合で学ぶための基盤をつくらうと努め、強固な地域力ができたと自負しています。連盟の仕事では徐々に運営的なことも学ぶようになりました。平岸小で教頭をしていた時に市の事務局長でしたので創立20周年事業の記念誌部門を担当してやり遂げられたこと、山の手小学校を会場に全道研究大会を開催できたことが私は一番の思い出となっています。当時、学校がきつかった分、連盟の仕事で発散していた自分がおりました。思い出は尽きません。連盟の皆さんと生活科・総合の研究ができて本当に幸せでした。ありがとうございました。益々のご発展を祈念しております。

## 札幌市生活科・総合的な学習教育連盟

夏季セミナー2021「生活・総合に求められる資質・能力と学習評価の在り方」

冬季セミナー2021「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の実際」

～研修セミナーを振り返って～

市研修部

札幌市立福住小学校 松尾 久美

研修部では、今年度、2回の研修セミナーを計画して行いました。コロナ禍で、なかなか集まって研修する機会がもてない状況が続いていましたが、オンラインも活用し、夏と冬に研修を行うことができました。夏季セミナーでは、研究部の授業部会と同日開催することで、市大会の会場校である円山小学校の先生方にも参加して頂くことができました。冬季セミナーでは、会場とオンラインを結んで、それぞれの状況に合わせて参加して頂くことができました。研修の持ち方を工夫しながら、たくさんの方に参加して頂き、研修を行えたことが何よりの成果だと感じています。研修を通し、生活科と総合的な学習の時間について話し合う機会がもてたことで、私自身、「今後の実践に取り入れていきたい。」「生活・総合をもっと学んでいきたい。」という思いを改めてもつことができました。今後も、皆様と一緒に研修できる場を大切にしていけたらと思っています。

### 夏季セミナー

「生活・総合に求められる資質・能力と学習評価の在り方」



7月29日（木）、円山小学校にて、三角山小学校の渋谷一典校長先生に講師をお願いし、「生活・総合に求められる資質・能力と学習評価の在り方」というテーマで夏季セミナーを行いました。円山小学校の先生方は会場で、連盟会員はオンラインでと、会場とオンラインをつなぐ形で研修を行いました。

始めに、渋谷校長先生より、生活科と総合的な学習の時間について、「単元の目標」と「評価規準」について、どのように作成を進めていくか教えていただきました。指導要領に示された「単元の目標」や「評価規準」を素に、学校ごとに、各単元で育てたい「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの資質・能力をより具体的にイメージし、それらを組み込んで「単元の目標」や「評価規準」を作成していく手順を学びました。

後半は、講演を受けて、市大会での授業づくりと合わせて、低・中・高の3つの部会でグループワークを行いました。それぞれ授業する単元について、「単元目標」と「育てたい資質・能力」を考えていきました。単元の導入からゴールまでどんな姿を目指していくのか、具体的に話し合うことで、「単元の目標」や「育てたい資質・能力」をより明確になり、市大会の授業づくりにつながりました。



「単元の目標」の素 「単元の評価規準」の素

3つの資質・能力の  
より具体的な姿

各学校の  
「単元目標」「評価規準」



## 冬季セミナー

### 「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の実際」

1月12日（水）、豊園小学校にて、三角山小学校の渋谷一典校長先生に講師をお願いし、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の実際」というテーマで冬季セミナーを行いました。会員以外の方にも参加して頂き、本連盟の活動を知って頂く機会にもなりました。

前半は、渋谷校長先生より、「主体的・対話的で深い学び」について、お話がありました。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、学習者の視点と授業者の視点、両方の視点から授業改善を進めることの大切さを教えていただきました。

その後、NHKの「ドスルコスル」を視聴し、主体的・対話的で深い学びの姿が生まれた場面について、グループ討議を行いました。学習者と授業者の両方の視点から、主体的・対話的で深い学びの姿がどのように生まれるのか、考えていきました。



講師：三角山小学校  
渋谷 一典 校長先生



学習者の「主体的・対話的で深い学び」が見られた場面は？



そこにつながる教師の関わりは何か？



オンライン上でも意見交流。研究部長の小山先生と中嶋先生がまとめてくれました。心強いです！

会場とオンラインで全体交流



授業改善のポイント？

- ・「何を学ばせるか」を明確にした**ねらい**、**活動**
- ・**子どもの気付きが生まれるような**教師の関わり
- ・アンケートやゲストティーチャーなど**教師の種まき**
- ・**問い続けるための**課題や人との出会いの構成
- ・「**何とかしなければ**」を生み、**理想と現実**を知って、**人と関わりながら**解決に向かっていく授業

「主体的・対話的で深い学びの姿」を目指した授業改善に向けて、授業者がねらいを明確にもって意図的に単元構成し、問い続けるような学習過程を構成していくことなど、授業改善のポイントを考えることができました。

夏季セミナー・冬季セミナーで講師をして下さった渋谷校長先生、本当にありがとうございました。そして、研修に参加して下さいましたたくさんの皆様、ありがとうございました。

# 令和3年度の研究を振り返って

札幌市生活科・総合的な学習教育連盟

研究部長 中嶋 孝幸

コロナ禍における研究の推進が2年目を迎えました。今年度は、GIGA スクール構想も動き出し、オンラインを活用した形での様々な取組を模索した1年でした。今年度の取組を振り返り、「できること」「できないこと」「できるが工夫が必要なこと」を明らかにして次年度からの研究に生かしていきたいと考えております。

そのためにも、ここで、今年度の研究推進に係る取組について、振り返ってみたいと思います。

## 1. 27回札幌市生活科・総合的な学習教育研究大会

今年度、札幌市立円山小学校を会場校に、第27回札幌市生活科・総合的な学習教育研究大会を開催しました。オンラインとオフラインを状況によって使い分けながらのハイブリッドの形式での大会開催は、新型コロナの影響により足踏みを余儀なくされた私たちの研究の歩みを少しずつですが着実に前進させる取組となりました。

また、今年度の大会は、令和元年度に学習指導要領が改訂されてから初めての大会となりました。そこで、これまでの研究主題、副主題を土台として研究部で実践課題を設定し、今後の新しい研究の方向性についても大変多くの示唆を得ることができました。

### ○公開授業

部会	授業者	単元名	部会長
低学年生活科(2年生)	竹次 奈央 先生	4組風けんきゅう室へようこそ!!	福井貴大(東苗穂小)
中学年総合(4年生)	磯部 莉々奈 先生	未来のためにできること	渡辺良太(幌南小)
高学年総合(5年生)	兼平拳吾 先生	円山見守り隊!!	村井悠介(北九条小)

### ○実践課題

- 生活科 ①単元における具体化した目標の作成 ②子どもが主体的に思考を深める活動の設定  
総合 ①単元で育成を目指す資質・能力の具体 ②子どもが主体的に思考を深める活動の設定

### ○各部会授業における成果と課題

	成果	課題
低学年部会	<p>○授業の様子からも見た通り、個々の「やりたい。」という思いが表れていた。一人一人が、「研究」という枠組みの中で<u>自信をもって追求している姿</u>や、全体交流の中で実験結果を伝え合う中で、<u>風について知識を深め合おうとする姿</u>が見られた。</p> <p>○教師が、<u>気付きの質を高めるために、本時に至るまでの子どもの気付きをしっかりと把握したり、本時に生まれる気付きを想定したりした上で、授業に臨むことができた。</u></p> <p>○教師の関わりが的確であり、洗練されたものとなっていたことから、報告会において、子どもたち同士が研究成果を伝え合うことを通して、<u>風について深め合う姿や、次時につながる新たな課題を生む姿</u>が見られた。</p>	<p>●<u>生活科なので、最も大切な「遊び」を通すことや「遊び」に変えることがこの単元では求められる。</u></p> <p>●<u>「遊びをもっと面白くしたい。」という子どもの思い・願いがこの学習の根底にあるべきで、今回の「風研究」が、自分の遊びに返っていくべきだった。</u></p>



<p>中学 年 部 会</p>	<p>○前半を「<u>知ること</u>」に重点を置き、後半を「<u>自分にできること</u>」に重点を置いたことで、<u>身近な現状を知るからこそ、自分にできることをやりたいという子どもの思いや思考に沿った流れにすることができた。</u></p> <p>○「<u>思考・判断・表現</u>」と「<u>学びに向かう力、人間性</u>」との連動が上手い<u>ったのではないかと考える。</u></p> <p>○本時における整理・分析場面では、<u>集めてきた情報をどの子もメリット、デメリットに分けて整理することができていた。</u>単元の前半によって、<u>環境問題に対する多面的な視点が育まれたからではないかと考える。</u></p>	<p>●本単元で<u>獲得させたい概念的知識をもっと明確</u>にしておく必要があった。そうすれば、<u>地域の企業を複数取り上げるのか、どんな事例を取り上げるのかなど、もっと明確になったと考える。</u>またそれに伴って、<u>目指すべき資質・能力の設定において、「身近」という言葉を多用したが、子どもにとって身近とはどういうことかをもっと吟味しておく必要がある。</u></p> <p>●<u>学びを深めていくためには、目的意識に立ち返ったり、既知の知識を用いたりして、問題解決に臨めるようにすることが大切であると改めて確認</u>できた。</p>
<p>高学 年 部 会</p>	<p>○<u>育てたい資質・能力を明確に捉えていたので、実際に指導する学年の教員と目指す子どもの姿を共有</u>することができ、<u>そこに向かって学年が一丸となって学習を進めることができた。</u></p> <p>○<u>詳細に目指す姿があること</u>によって、<u>単元を進める際に見通しがもちやすかった。</u></p> <p>○<u>問題意識を生むための手だて</u>としてアンケートの提示を行ったが、<u>子どもの意欲を引き出すのにとても効果的</u>だった。</p> <p>○<u>体験活動が生きた交流の中身</u>になっていた。</p>	<p>●<u>家族の一員としての防災意識をもう少し高められるような組み立て方が必要</u>であった。</p> <p>●それぞれの<u>資質・能力を身に付けた姿が、より具体的</u>になると、<u>さらにより学習になる。地域の特性も含んでいくとよい。</u></p> <p>●<u>交流について必要感</u>がもてるようにしたり、<u>一度立ち止まって深く考えられる場面を設けられるようにしたり</u>するとよかった。</p> <p>●<u>交流について、自分の意見は言えていたが、話し合うまでの姿まで見られなかった。</u>ただ意見が重なっていくような形で、<u>練り直し</u>までいかなかった。</p>

今年度の市大会では、「主体的に学ぶ子どもの姿」と「育成すべき資質・能力の具体化」の2つをキーワードに実践課題を設定し、実践研究を行いました。円山小の3実践の成果と課題からも分かるように、生活・総合どちらの実践においても育成すべき資質・能力を具体化することが、単元の構築の方向性を定め、教師の見取りやかかわりを明確にすることにつながるということが、実践ベースで明らかになりました。その結果、子どもの主体的な姿が見られたことから、今年度の実践課題が、今後の研究の道標になるという手応えを感じることができました。

一方で、子どもが問題意識をもち、より探究的な見方・考え方を働かせて学びに臨むという点においての課題も明らかになりました。

以上のことから、今年度の成果である「育成すべき資質・能力の具体化と単元デザイン（カリキュラムマネジメントの視点）」というマクロの視点に加え、「授業単位における子どもの深い学びを実現する手だて（アクティブラーニングの視点）」というミクロの視点からも実践研究を進めていくことで、研究主題「自分の学びを実感し、未来を拓く子どもの育成」につながるのではないかと思います。

最後になりますが、このコロナ禍において、開催形態も不透明な中、本連盟の研究推進にお力添えをいただいた授業者、各部会の先生方、そして札幌市立円山小学校の皆様には、感謝の気持ちが尽きません。感謝の思いとともに、今年度円山小の皆さんからいただいた今後の研究へのご示唆を、次年度からの研究につないでいきたいと思ひます。

## 2. 研修会「侃々諤々」の立ち上げ

今年度の研究会、研修会のオンライン化にヒントを得て、研究部主催の研修会「侃々諤々」を立ち上げました。2年前、新型コロナの影響からストップしてしまっていたそれ以前のような活発な研修の場を、どうにかして作って

いきたいというのが、「侃々諤々」立ち上げの始まりでした。

「オンラインでの研修」という未知の取組について、様々なオンライン研修に参加したり、たくさんの方のご意見を伺ったりしながら構想を練っていく中で、「オンラインの強み」が見えてきました。それは「どこにいても参加できる」という強みでした。

そこで、函館地区の事務局長であり、実践家でもある北海道教育大学附属函館小学校 阿部 智先生にこの話を打診したところ、快く引き受けてくださいました。また、今年度札幌へ戻っていらっしゃった三角山小学校 渋谷 一典校長先生にも同様に協力添えいただくことができました。

こうして動き出した「侃々諤々」ですが、この名前には、ある思いを込めました。以下は、フライヤーに掲載した文章です。

この研修会では、「立場や年齢の違いにとらわれない主体的な学び」を前提としながら、生活科や総合的な学習の時間に関わる学びを深掘りできるような内容を提供します。

深掘りとはいっても、専門的な難しい内容を取り扱うわけではありません。例えば、研究大会等で連盟会員が発表した実践提案を再構成してみることに、他にも「主体的・対話的で深い学び」「令和の日本型学校教育」「カリキュラム・マネジメント」「思考ツール」「ICT 機器と探究」など関心の高いキーワードをテーマにした学習会や座談会を行うことなど、生活科・総合的な学習の時間をもっと知りたいという基礎的なニーズにも対応した内容を目指します。(中略)

私たちは、連盟に所属する全ての会員が立場や経験など既存の枠組みを超えて大いに学び合う機会としたいという願いから、この研修会を「侃々諤々(かんかんがくがく)」と名付けます。

第一回目は、総勢23名、全道各地から参加いただくことができました。また、担任の先生から校長先生、幼稚園の園長先生など、多種多様な立場の方に参加していただきました。それでも、決して堅い話に終始することなく、時に鋭く、時のアットホームな雰囲気でも様々な議論することができました。

この会を開催するにあたっては、小山市道研究部長を始め、札幌の研究部員の皆さんにもご尽力いただきました。この場を借りて、感謝申し上げます。

これを皮切りに、今後も隔月程度のペースで開催していきたいと考えています。皆さんの参加、お待ちしております。



以上、今年度の札幌市の研究推進について振り返ってみました。まだまだ手探りではありますが、研究部一丸となって研究を一步でも進めようと努めてきました。次年度も、連盟の皆さんと一緒に研鑽を積み、札幌市の生活科や総合的な学習の時間の充実のために学び合っていきたいと思います。

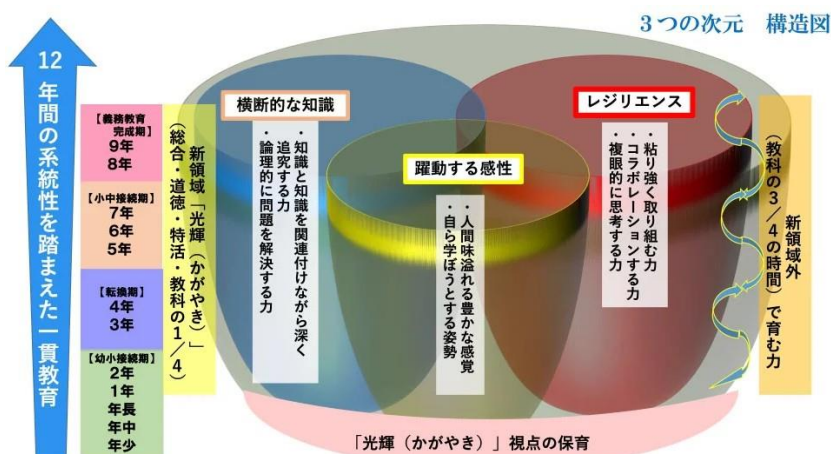
## 1) はじめに 広島大学三原学校園（幼稚園・小学校・中学校）の取組から

三原学校園では、平成30年度より新たに文部科学省研究開発学校の指定を受け、新領域「光輝（かがやき）」を核とした研究開発を進めている。今年度、研究開発4年間の4年次にあたり、その取組が令和3年12月4日(土)にオンライン上で公開されたため、参加することにした。次年度は、日本生活科・総合的学習教育学会全国大会会場校とのことで、注目する大会であった。

## 2) 新領域「光輝（かがやき）」を中心とした幼保小中一貫教育

研究会では、多様性社会の中で「生きて働く力」を育む12年間の一貫教育カリキュラムを中心として一貫をテーマに、新領域「光輝（かがやき）」の研究発表に加え、保育教科の実践発表・協議会が実施された。高度に競争的でグローバル化された多様性社会に適應するために求められる3つの次元「躍動する感性」「レジリエンス」「横断的な知識」を設定し、その基礎となる資質・能力を育成する幼小中一貫教育カリキュラムの研究開発を進めている。下図のように「光輝（かがやき）」のカリキュラム開発を通して、自ら学ぼうとする姿勢、論理的に問題を解決する力、粘り強く取り組む力、複眼的に思考する力、人間味溢れる豊かな感性、コラボレーションする力、知識と知識を関連付けながら深く追究する力を子どもたちに育成していくことを目指している。

新領域「光輝（かがやき）」とは、道徳、特別活動、総合的な学習の時間に加え、各教科4分の1程度の時間を関連させメタ学習を行うものである。三原学校園では、各教科と光輝を往還させた学習から結合を目指す教育を進めることで、子どもたちの学びや育ちがどのように変容していくのかを研究している。道徳や特別活動を包摂することにより、実践を活かし、考え、学んだことを実践する場としている。また、児童に光輝の学習アンケートを実施し、カリキュラムの見直しを図っている。新領域を基盤として、カリキュラム・マネジメントを行っており、自分たちの今後の小中一貫教育のヒントを多く学べる実践校であると感じた。さらに、ICTを活用した学びの個別最適化においても、タブレットを活用し、活動内容を充実させるための学習評価を考案・実践している。





### 3) 小中一貫教育部会に参加して

第1分科会では、幼少接続期（幼稚園・1・2年）転換期（3・4年）小中接続期（5・6・7年）義務教育 転換期（8・9年）の4部会に分かれて、提言とブレイクアウトルームでの参加者による小交流が行われた。私は、小中接続期（5・6・7年生）に参加し、その実践発表から学ぶことができた。

#### 5年「輝け！GOGO文化祭」の実践

- ・宿泊学習が実施できなかった代わりに、自分たちで文化祭を開催することに。
- ・教科から光輝へ 計画力・団結力・応用力の向上を目指した。
- ・裁縫小物作り（家庭科）、合奏（音楽）ピタゴラ・スライム（図工）など 各教科と光輝を結合させながら、学習を展開

#### 6年 芸術科「舞台を創ろう」の実践

- ・アンケートの結果、学年の実態としてコミュニケーション能力を高めることを目指す。
- ・衣装作り（家庭科）音響（音楽）大道具・小道具、メイク、舞台背景（図工）
- ・自己統制力 関係調整力など、子ども自身が自己評価し、教師が客観的に見とるための観点を設定

#### 7年（中1）グループ探究学習

わたしたちが暮らすまち「三原」

- ・問題の見だし→情報収集→まとめ
- ・「OSP（ワンシート・ポートフォリオ）シート」をスプレッドシートで作成、クラスルームで提出することで、振り返りを集積できる。
- ・ICTの活用・・・共同編集など資質・能力の捉え
- 5・6年生→児童が自分の言葉でキーワード化
- 7年生→自分たちの言葉で表現 文章化
- 3年間継続することで、資質・能力の捉えが高まる 自覚化する

#### 【成果】

- ①子どもたちによる資質・能力のキーワード化・文章化・・・学年が進むに連れて高まり、付けたい力として意識される
- ②各学年のレジリエンスの実態が把握できる

#### 【課題】

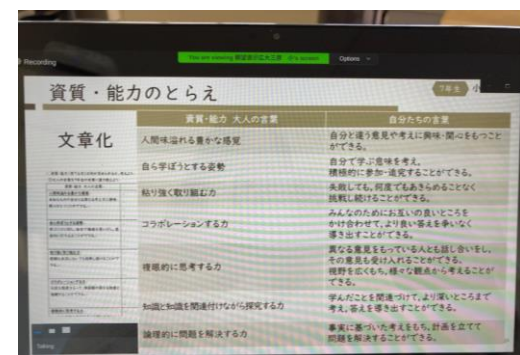
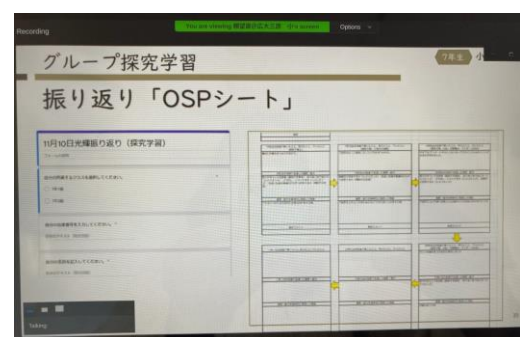
子どもたちを見取る指標 今後より精度を上げていくには

#### 【ブレイクアウトルームでの質問から】

- ・資質・能力の捉えを子どもたちとどう共有したのか？
- 5・6年 教師が説明 意味を提示 →グループで話し合い（3～4コマ）子どもたちにとって身近な言葉になるように

7年 附属小から進学30人 公立小から入学10名

- 光輝とは？から説明→始めは小学校で経験のある子どもから意見を引き出し
- 進級してどうなったかアンケート調査で学年のカラーを見取る

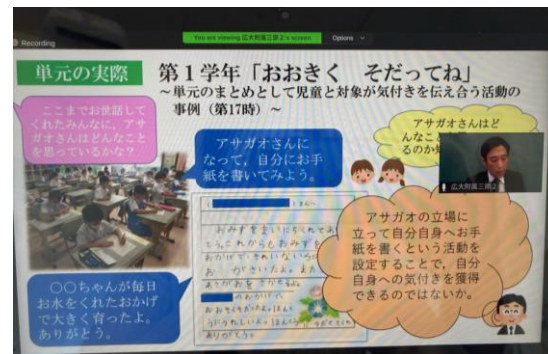


#### 4) 第2分科会(教科)

第2分科会では、生活科に参加した。1年「おおきくそだってね」の栽培活動の実践発表であった。アサガオの実践であったため、ブレイクアウトルームでは、どの参加者も自分の経験と重ねて想起しやすく、実践のよさも共有できた。

1年「おおきくそだってね」の実践発表から

- ・子どもの思いや願いを共有するため、何を育てたいか?からスタート
- ・個別的な気付きから、友達の気付き、自分自身の気付きへと自然な流れで
- ・アサガオさんの立場に立って、「自分にお手紙を書く」活動へ
- ・気付きが把握できる観点の設定・思いや願いが連続
- ・発展するような活動構成 ワークシートの活用



成果と課題(授業者から)

【成果】①気付きを伝え合う活動の単元における位置付け方や、その形態、内容、伝え合う内容、伝え合う相手を工夫することで、気付きの質を高めることができた。

②単元終盤に教師の発問に対して児童同士が気付きを伝え合う場を設定することで気付きの質を高めることができた。

【課題】単元のまとめにおける対象と自分自身を関連付けた気付きを獲得するための、気付きを伝え合う活動について検討の必要がある。

#### 5) 終わりに自校で取り組んでみたいこと

① 資質・能力の捉えを子どもたちと共有する

- ・子どもたちの言葉で「付けたい力」や「なりたい自分」を共有し、日常の学習で振り返り、高めていくことは、主体的・対話的で深い学びに必要な教育活動である。さらに、三原学校園のように小・中で共有し5年から中学まで継続することで、自覚化され、ブラッシュアップしていくのではないかな。

② スプレッドシートの活用によるルーブリックの作成や情報の共有

- ・中学では、個人のスプレッドシートに「学校生活の中でしたいこと」を教員が共有し共同編集して書き込んでいるという実践が紹介されていた。様々な教員で1人の子どもを見取っていくことができる。簡単に時間をかけず、エピソードをメモしていくことで子ども理解が深まるのではないかな。また、中学への引継ぎなどもシートを活用できる。

③ ICTの活用

- ・整備された1人1台端末を、学校が目指す資質・能力の育成のためにどのように活用するとよいのか。個別最適化とは「子ども自身が学習が最適になるように調整する」ことである。デジタルシンキングツールなどを活用し、メタ認知をもとにして学習を改善する能力を身に付けることができるようにしていきたい。また、学びの履歴を集積し、どのように利活用できるのか、子どもたち自身が学習を改善する力をどう付けていくのかを今後検討していきたい。